特集

子ども・若者が社会を変える――SDGsの学び

論文1

深いSDGs教育を目指した学校変容への挑戦と授業実践

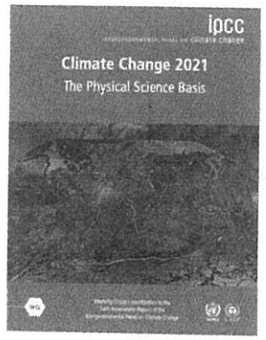
――学校の変容から社会の変容を目指して

山藤旅聞（さんとうりょぶん）

●新渡戸文化中学校・高等学校統括校長補佐（学校デザイナー）／一般社団法人Think the Earth SDGs for Schoolアドバイザー 他

(1)深いSDGs教育を目指して ～創造する学びへ～

2021年8月にIPCCからClimate Change2021～The Physical Science Basis～（第6次評価レポート）が公開され、気候変動について、全ての原因は人間活動にあることが証明された。どのような気候変動対策を実施したとしても2030年には産業革命を基準とした世界平均気温は＋1・5℃の上昇に達するという内容も公開されており、具体的で迅速な対策が全世界に求められる内容でもあった。私も1人の教育者として、このレポートに反応すべく、焦るけれども冷静に、かつ創造的に未来をつくるための教育デザインを、1つでも多く実践し、生徒ともに発信することを強く心に決めた。

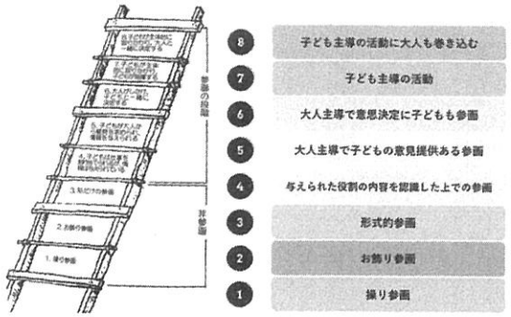


一方、2015年の12月にパリで開催されたCOP21（気候変動枠組み条約締約国会議）に向けて、世界各地の市民の声を届けるべく、世界96ヵ所でWorld Wide Views Climate and Energy（世界市民会議「気候変動とエネルギー」）が開催された。そのアンケート調査の結果で気になったのは、「設問1―2　あなたにとって、気候変動対策はどのようなものですか?」という設問に対し、世界全体では「生活の質を高めるものである」と66％の市民が答えているのに対し、日本の市民の60％は、「生活の質を脅かすものである」と答えていた。創造的な解決が必要な課題について、日本人は我慢とか、悪い方向へ向かっているという恐怖が根底にあるようである。

そこで、教育現場としては、予測可能な未来について、創造的解決を目指していくワクワク感の導入を意識している。また、教師や生徒の変容→学校の変容→地域・社会の変容とつながることを実感できる教育デザインの創造と実践を心がけてきた。筆者は、一条校で、かつ新設校ではなく伝統を持つ既存の学校において、伝統的な学校文化を持続可能性文化へシフトし、学校変容と社会変容の好循環を生み出す学校改革・授業改革に挑戦している。ここでは、その挑戦の一部について報告していきたい。

(2)学校文化をつくるための共有 ～対話を重ねる～

学校変容を目指していくためには、教職員の最上位目標の共有とともに、教職員が同じ言葉で子どもたちと接していく言葉選びの合意形成が重要であると考える。本校の教育理念は「自律型学習者」であり、多くの学校も、自律や自由を掲げていることと推測する。本校では、初代校長の新渡戸稲造の残した理念を今でも引き継いでいる。余談になるが、江戸、明治、大正、昭和と、劇的に変化する時代を生きた新渡戸稲造は、社会が大きく変わり価値観が定まらない激動の時代だからこそ、自分で考え、自分で判断し、自ら行動していくことを大切にする教育を当時から求めていた。自律型学習者、つまり生徒が自律的に学習していくとはどういう状態なのか。この状態について全職員で共通の言葉で定義をしていった。本校では、子どもの自律性について心理学者ロジャーハートの8段階で整理した。5段階目までは完全に大人主導だが、生徒主体（自律）につながる布石として捉え、6段階目からの、「生徒が意識決定に参画できているか（6段階目）」・「大人ではなく子供主導の活動になっているか（7段階目）」・「大人が巻き込まれているくらいの活動（8段階目）」となっているか」を、全職員がメタ認知できるように研修を重ねた。つまり、本校の全職員は、自分の教育活動の1つ1つが、8段階のどの段階にあり、目指すべき生徒の自律的な状態について、俯瞰するスキルを高めていったのである。結果的に、あなた（生徒）がどうしたいのか、そのためにあなた（生徒）は何をしないといけないか、そして、私たち（教員）にどうサポートして欲しいかを、全職員が生徒たちに問えるように変容していった。この言葉を全職員が持つまでには約2年必要であった。その間、教員同士の「対話」を心がけた。この教職員の変容が、生徒の変容や学校全体の変容にもつながっていった。



「子どもの参画」（ロジャー・ハート、萌文社、2000）から

(3)深いSDGs教育をデザインする要素 ～自分たちの考えと言葉を持つ～

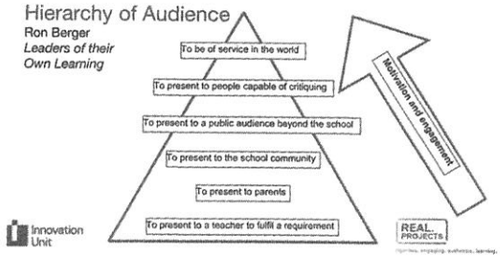
次に授業や行事の教育活動をデザインする際に、深いSDGs教育をつくるための要素の提案と、この要素を取り入れた実際の具体的な教育デザインについて紹介したい。経験値ベースの提案になるが、深いSDGs教育をデザインするための要素は、次の要素があげられる。ここで提示する「要素」は、本校の職員による「対話」によって出てきた要素になる。

①答えがない教育活動である
②学習内容を活用するアウトプットを設計する
③ワクワク感（好きから始める）を導入する
④生徒や先生が笑顔になる時間をつくる（ステークホルダー全員の笑顔）
⑤誰かに伝える活動を学びのゴールとする
⑥学習内容と身近なこととのつながりに気づけるしかけをいれる
⑦社会課題と学びのつながりを感じるしかけをいれる
⑧小さく行動できることを繰り返す
⑨教室（学校）を飛び出す活動を当たり前とする
⑩グループ活動の方が適した課題を選ぶ

これらの「要素」を、どのように学校文化に取り入れているかの事例を紹介していく。

(3)―1 文化祭を手段に学びをパブリックに公開していく文化 ～学びは未来つくり～

EL Educationのチーフアカデミックオフィサーであり教育者でもあるロン・バーガーの著書「Leaders of their Own Leaning」では、生徒のモチベーションとエンゲージメントが高まる「場」について紹介されている。図の下から上に向かうほど生徒のモチベーションが高まる「場」ということで、下から順に「教師のた

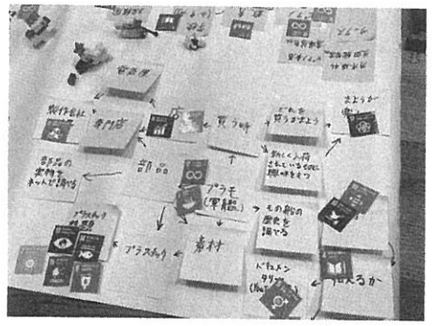


めの提出物」「保護者への発表」「学校内での発表」「学校外での発表」「専門家への発表」となり、最上位は「世界や社会に対する発表」の場となっている。授業で学んだことを成績や、テストのためにアウトプットすることを目的とはせず、文化祭などを通じて、地域や社会、時には専門家に向けて新しいアイデアやアクションを提案することの重要性を考察できる（引用 https://kotaenonai.org/blog/satolog/3336/）。

具体的には、文化祭等を活用し、持続可能な社会への行動事例を考え、参加者に発信することは簡単にできる。「消費」をテーマに、サステナブルラベルの紹介や、校内の花壇でオーガニックコットンを栽培し、自分たちのチームTシャツを作ろうとするプロジェクトを紹介するブースを作り、文化祭の参加者（消費者）に行動変容を促した活動（上段写真・上）や、学校の1日で出てくるペットボトルゴミからイルミネーションアートを作りだし、自分たちの無意識な大量消費行動について啓発する部屋を作った（上段写真・下）。　目的を明確にすれば、深いSDGs教育に向かう要素の全てが含まれた学びの機会に文化祭はなりうる。

⑶―2　探究活動の活用　～自分の「好き」×SDGsでつくるプロジェクト～

生徒一人ひとりが学ぶ目的を確認する助けにSDGsを活用する例をここでは紹介する。考えたのは「好き」と「SDGs」を掛け算させた授業展開である。この教育活動は博報堂DYグループの「Q&Action for SDGs」ソーシャルプロジェクトチームのみなさんと協働してデザインしてきた手法（step1、2）に、筆者オリジナルの手法（step3、4）を追加させたデザインとなっている。



①step1「好き」を分解する

写真のように、生徒は一人ひとりの「好き」をマインドマップのように自由に分解する（図の作品は「プラモデル（軍艦）」からスタートさせている作品である）。この時、「好き」を「教科」や、「分野」、「単元」にアレンジしても良い。

②step2　SDGsを関連させる

写真のように、「好き」を分解したあとは、そこにできるだけSDGsの目標を関連させる。ここは、直感的で構わない。本校では一人ひとりにSDGsのカードを渡すが、特にSDGsの解説はせず、カードを読んで、関連していそうなところに置くように伝えている。

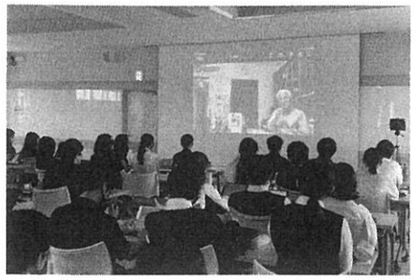
③step3　本物を探す

このステップが重要と考えている。自分の「好き」とSDGsを関連させたあとは、付箋のキーワードと、SDGsのキーワードを多様に組み合わせて、「本物」をインターネットで検索していく。本物とは、「本、イベント、企業、NPO／NGO、人」と定義している。例えば、この生徒は「軍艦・責任・イベント」「プラスチック問題・海・企業」「プラスチック・エネルギー・NPO」など、組み合わせを考えていく。そして、インターネットの検索を通じて本物を探し、自分だけの次の行動を考えていく。

④step4　行動する

本物が検索できたら、本を図書館で探して読んだり、イベントがあれば申し込みをしたり、企業などがヒットした場合は、取材のアポをしたりと、各自の行動を促していく。写真の作品を作った生徒は、自分の作っていた軍艦模型である駆逐艦名が入った本を見つけ、そこから著者であり年少兵として搭乗していた人にインタビューをしていく行動が生まれた。そのインタビューで心が動かされたこの生徒は、その後オンラインを活用した全校生徒対象の講演会をプロデュースし、中高生が戦争と向き合う授業を作っていった。

このようにSDGsは、生徒一人ひとりが学ぶ目的を確認し、主体的な活動を始めるきっかけになる。この探究活動は、深いSDGs教育に向かう要素が全て含まれる。



⑶―3　フィールドワークの活用　～地元・地域と生み出すプロジェクト～

フィールドワークは、教室ではできない学びを実現させる最高の学びの1つである。しかし、フィールドワークのデザインの見直しも重要である。本校では、フィールドワークにも持続可能な未来を創造していくことを目指すことを心掛けている。その1つとして、毎月1回、東京都檜原村における活動を実施している。今年で6年目となる活動に発展しているが、フィールドワークの目的が、持続可能な未来を創造することなので、毎年、新鮮な気持ちで活動が続いている。SDGsの目標で表現するなら、持続可能な生産消費、水陸生態系および森林管理の持続性などが挙げられているが、これらの要素は、一番の消費者である都心で生活する大人や、生徒たちの日常からは遠い存在である。まずは消費者と自然をつなぐことを重視して始めた活動だった。そして、持続可能な社会に向けて、値段と便利さではない、エシカルな物差しによる次世代の消費意識の変容を目指し、現在は3つの活動へと発展している。1つ目は、耕作放置地の開墾からオーガニックコットンを栽培し、糸紡ぎから加工・染織をするプログラム。2つ目は、檜原村名物の「ヒノジャガ」を育て、ジャガイモアンのおやきなど、地産地消の新しい商品の開発を目指すプログラム。3つ目は、薪や炭、堆肥利用目的の里山から、果樹を植林することで、果実からの食品加工、そして販売までの6次化を考えるプログラム、である。

2021年6月の様子

耕作放置地をオーガニックコットン畑にリノベーションしたが、コロナ禍でシカが増えたことで獣害にあい、その対策としてネットを畑に設置した

毎回10人～20人、2017年から現在まで、のべ1000人を超える中高生・大学生（卒業生）が参加している。この活動には、現地NPO法人や檜原村の村役場の理解と協力は欠かせない。目的が明確だからこそ、例年通りのフィールドワークにならず、毎年、関係者が増え、活動の幅や種類が増え、成長を続ける活動になっている。

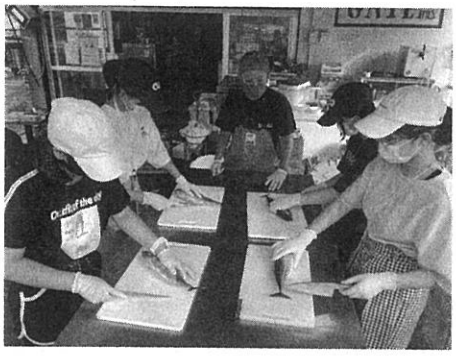
⑶―4 旅とSDGs ～脱・修学旅行～

10代の旅の経験は、教育効果としては計り知れない。目的が思い出作りとなり、パッケージツアー化した修学旅行からのトランスフォームにも挑戦している。

自然資本を活用する文化の衰退は、日本の抱える大きな課題でもある。また、生態系に配慮された定置網漁業は、狙った魚種が獲得できないことから、食品ロスにつながる課題もあげられている。

これらの課題を自分ごと化することを目的とする旅をデザインした。そのために、地域の活性化に尽力する企業やNPO、大学、そして行政との協働をはじめた。2021年12月の時点で国内で7カ所、国外で3カ所のデザインに成功している。ここでは、国内ツアーの1つである三重県スタディツアーを紹介する。日本の原風景が残る漁村で定置網漁を経験し、捕った魚を市場に水揚げし、値段のつかなかった魚を調理して食べることを中心とした、日本の地方が持つ魅力を五感で感じるツアーとなっている。協働した企業は、持続可能な社会の実現のため、生産地と消費地の懸け橋となることを目指していて、水界生態系に配慮した定置網漁を始め、獲れた魚を自社で加工し、自社便で都心部に届ける事業を展開し、水産業の6次化を実現させている。豊かな海で獲れる魚は東京では見たこともないような名も無い魚ばかりなのだが、地元の調理方法と鮮度により、今までに食したことのない美味しさを体験できる。訪れた漁村は現在、高齢化率が80％を超え、小学校も中学校も休校となっている。子どもや若者がほとんどいない町を訪れたことにより、参加生徒一人ひとりが「この街がなくなるのは寂しい」「名もなき魚の美味しさを東京の人たちにも知ってもらいたい」と語ってくれるように変容していく。結果的に日本の抱える課題の解決に向けて、何ができるかを考える気持ちが自然と芽生えてくるのである。帰りの車中では早速、定置網で取れる魚の種類や調理方法を動画で収め、SNSを活用したビジネスモデルの原案を考え始めていたり、定置網漁のおすすめメニューを考案し、広めていきたいというアクションが生まれていっている。

このツアーは今回で3回目になるが、毎回、ツアー後には生徒たちの目の色が変わり（生徒の変容）、社会変容に向けての行動が自然と誕生していく。旅も深いSDGs教育の全ての要素が自然と含まれている。目的の見直しや、パートナーを組むステークホルダーの重要性を強調したい。



⑷不完全でも行動する経験

人間生活による環境負荷も限界に近づいていることを、毎年続く異常気象などから感じざるを得ない。この解決策に絶対的な正解は世の中に存在しない。しかしSDGsのように具体的な指標も示されている。「答え」を待ってから動くのではなく、不完全でも行動してみる行動力を高校時代までに経験することは、予測不可能時代を生きる生徒にとってとても大切な能力（コンピテンシー）になることは間違いない。ここに、日本は平和で安全、均質性が高い国であるが故に「前からそう」「○○はふつう、こう」という固定概念が行動にブレーキをかけることがある。これからの時代の造り手である若者に固定概念を提示する大人や学校ではなく、若者の行動を寛容に見守り、包括し、そして共に行動する大人の伴走や、そのような学校文化の醸成が今後の教育には重要と考える。この伴走の共通言語がSDGsであり、SDGsを教育に取り入れることで、さまざまな世代の架け橋となり、生徒主体の教育デザインを生み出すきっかけになることを期待している。